

鷹揚たる美学

飯田 篤司

先生のご業績については諸兄がすでに記されていることと思われるので、ここでは先生に教えを受けた一人の学生としての感想を述べさせていたきたい。私が宗教学研究室に進学した当時、比較的、思想的な側面からの宗教研究を志す学生が少なかった事情もあり、指導教官である金井先生には人一倍お世話になってきたと自覚している。教員ならびに研究者として日々激務をこなされつつも、先生はいつでも「士大夫」という言葉を想起させる、余裕に満ちた物腰を漂わされていた。なぜ、いつも、かくも泰然自若としていられるのか、それが学生時分から謎であった。

それは研究指導の折りにおいても変わりはない。先生のご指導は寛容の極みといえよう。風変わりな研究計画を持ちこむ度に先生は「あーそーですかー」とまず鷹揚に頷かれる。そして「おもしろいねえ、がんばってください」と、励まされる。これは決して内容に不備がなかったということではなく、出した本人がむしろ当惑することもしばしばであった。今振り返ると死にたくなるので振り返らないが、ただ当時の私は、このお言葉を「おもしろいことをやれ」という定言命法と

して受け取り、「芸能金井組」と自称していたことも事実ではある。紆余曲折を経て、私がまがりなりにも現在の研究領野に到達したのも、博士課程も修了しようとする時期であった。先生の眼からすれば、えらく遠回りしたものだ、苦笑されているに違いない。ただただ「機」をお待ち頂いた先生の忍耐には頭が下がる。

しかし、ただ甘かったわけではない。不肖ついでにこの弟子は、二言目には「もう研究やめる」と口走るクセもあった。そんな折り、先生にこのように諭されたことがある。「自分が志したことをやっているという幸せについて自覚するように。そしてやりたいことをやるのなら、泣き言を言うな。」語調はもっと柔らかかったが、このような旨であったと記憶している。「そもそもプラグマティックな意味では、研究者という生き方はわりに合わない。それならば、せめて自分のやりたいことをやらねば、意味がない。」弟子がたとえ迷走、時には暴走することとなっても、「矜持」を失わぬ限りご寛容であったのは、このように研究者として、そして一人の人間として自立を促していくものであったと思われる。それゆえ「醜悪さ」

に対しても、厳しく戒められたのであろう。先生ご自身、必ずしも何不自由なく、というわけではなかったことを知っている今では、先生の鷹揚たる姿勢は、一種の美学のようなものであったのであろうと理解している。

ただその金井先生に「美学を曲げて」までもお力添えをいただいたことがある。博士論文の締め切りと人生の転機とが重なり、研究生生活を続けるか否かの最終的な決断に迫られた時のことである。何度も休日に新宿まで足をお運びいただき、喫茶店で周囲の喧噪をよそに、親身にご相談にのって下さった。やはり、なんだかんだといっても「甘

い」先生であったのかもしれない。

このたび先生がご退官なさるといふ段となり、「鷹揚たる美学にならう」という口実の下に遅々として成果の進まぬ不肖重ねの弟子として、また教壇の端っこの方で from hand to mouth の日々を送っている身としても、我が身を「美意識」の下に反省せざるをえない・・・「恩師の後ろ姿」とはよく言ったものである。恩師の退官という時分には、「今後ともご指導のほど、何とぞよろしくお願い致します」という定型句を書くこととなっている。現にその時期が来てしまった今、それが単なる修辭ではないことを実感している。